

令和七年度春季入学秋季募集  
熊本県立大学大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士前期課程  
一般選抜試験問題 専門科目 解答例

①

問一 古今和歌集

問二 紀貫之

問三 ア 満

イ 連

ウ 比

エ 佐

オ 布

問四 A 見るものきく物につけて

B 水にすむかはつのこゑ

問五 X 誰であっても歌を詠まないことがあるうか

Y 和歌は天地が創られた時から出来ていた(備わっていた)のだ

問六 男女の心が打ち解ける / 乱暴な武人の心を癒す

②

① 〈解答のポイント〉

双方の下接状況の提示としては次が考えられる。ただし、後に記す説明と整合的であれば、小異は問わない。

ジンが下接 一般 社会 自由 文化

ニンが下接 請け負い 見物 販売 被告

双方が可能 出版

使い分けの傾向としては、次の観点からの説明が考えられる。

・「ニン」が下接するのは、サ変動詞の語幹になり得る語（「動名詞」と称されることがある）が中心である。

・サ変動詞を形成しない「被告」を含めた説明を行うとすると、一時的な立場や役割の意味を担う語の場合に「ニン」が下接する場合に「ニン」が下接するとも考え得る。

・一時的な立場や役割ではなく、継続的な属性にあたる意味を担う語の場合に「ジン」が下接すると考えれば、「出版」をする（した）人は「ニン」、「出版」に係る一般的な資格や倫理、振る舞いを身に着けた人は「ジン」となる。

② 〈解答のポイントと解答例〉

・仮名日記成立の背景を理解している。

・仮名日記の主要な作品を年代順に整理できる。

・個々の作品の特質（内容・文体・意義等）を説明できる。

『土佐日記』冒頭に「男もすなる日記というものを、女もしてみむとてするなり」とあるように、『土佐日記』以前、日記と言えば、男性官人による漢文日記が主であった。ただし一

方で、円仁の『入唐求法巡礼行記』といった旅行記や、女房による仮名の歌合日記の存在は、記録であるとともに、筆録者の内的世界を記述してゆく日記文学が形成される土台となった。また、『竹取物語』や『伊勢物語』で実現された、仮名による物語世界の創出は、翻って自己の内面へとアプローチする仮名による筆録の可能性を大きく広げたことは言うまでもない。『土佐日記』以後、女性の筆録者による仮名日記が記されてゆく。道綱母の『蜻蛉日記』において、自己の内面世界をより深く捉えて叙述する方法は、『源氏物語』にも影響を与えたとされる。平安中期以降は、『紫式部日記』や『和泉式部日記』、『更級日記』『讃岐典侍日記』といった、いずれも個々の立場や視点による作品がある。『枕草子』もまた、女房日記の性質を有する。鎌倉時代に至ると仮名日記は、女房日記の終焉期を迎える。主な作品として、『たまきはる』『弁内侍日記』『中務内侍日記』があげられる。

仮名日記の嚆矢となった『土佐日記』は、紀貫之が、承平四年(934)から翌年二月にかけて、土佐守の任を終え、京へ帰るまでの旅を月次の体裁をとりつつ描いたものである。女兒を喪った悲しみ、がめつい船頭や留守宅を預かった隣人に対して抱いた憤懣と人間の無常や人心の変化への歎き、都の抛り所としていた人々を亡くした喪失感などを織り交ぜながら記す。冒頭に女手と表明することで、折々の歌と歌にまつわる記事を展開させることにも成功している。『土佐日記』が女手に仮託することによってはじめて獲得された仮名散文による機能の数々は、表現の可能性を飛躍的に押しひろげる役割を果たした。

### ③

#### ③ 〈解答のポイント〉

以下の二点を抑えたいうえで適切な術語を用いて説明する。

- ・ 日本語におけるナ形容詞とイ形容詞の活用の違いについての説明。
- ・ 「きれい」はナ形容詞の語幹だが、イ形容詞の終止形と勘違いしやすいこと。

#### ④ 〈解答のポイント〉

文学史的事項を社会状況との関りできちんと頭に入られているか、またそれが自身の表現できちんと論述できるかを問う。

- ・ 日本へのマルクス主義の移入とその展開
  - ・ 社会構造的な労働者搾取の進展
  - ・ 前項と文学の結びつき
  - ・ 政治と資本家の結託による弾圧の強化
  - ・ 前項並びに運動方針の乖離による退潮
- 以上のような事柄・展開が具体的な作家・作品を挙げて記載できていればよい。

#### ⑤ 〈解答のポイント〉

共通点と言えるものとしては地図上における分布(見た目)の類似性が挙げられ、相違点と言えるものとしては発生のメカニズムが異なることが挙げられる。

#### ⑥ 〈解答のポイント〉

・ 所謂、開合合一の時期に関して、次のような検討を行う。ただし、有効な根拠のもとであれば、時期が前後していてもかまわない。

仮名表記等に反映した開合の混乱の例は早くから見えるが、例えば、規範性を重視するキリシタン資料で若干の異例を含みつつも書き分けがなされていることなどに基づく、近畿地方では、十六世紀後半前後からの顕著な合一の進行が見込まれる。

・『片言』の性格と開合合一時期との関係を踏まえて、例えば次のような本文解釈を行う。

京都在住の貞室が、自身の子が昨今の言い誤りになずむことがないようにとの目的で記した著作である。これを踏まえると、開合の区別の記憶を有しつつも、合一がある程度進行した段階に生きる貞室が、<sup>○</sup>由来の才段長音と<sup>●</sup>由来の才段長音が掛詞で同一の扱いを受けていることを、旧来の区別を保つべきとの立場から批判しているということになる。

#### ⑦ 〈解答のポイントと解答例〉

・人麻呂の活躍時期を把握している。

・人麻呂の主要な作品を挙げることができる。

・人麻呂歌の特徴を具体的な作品に即して説明できる。

・後世における人麻呂歌の影響について触れられている。

『万葉集』第二期の代表的歌人である柿本人麻呂は、長歌・短歌ともに優れた作品を多く残している。「日並皇子挽歌」「明日香皇女挽歌」「高市皇子挽歌」など、皇子・皇女の挽歌が複数あることや、吉野讚歌があることなどから、持統朝に、宮廷内において活躍したと考えられる。代表的な歌群のひとつに、「石見相聞歌」がある。人麻呂が石見を離れる時に、現地に残して行く妻との別れを惜しむ歌である。対句の連続によって、石見の景から思い出される妻の姿へと展開し、その盛り上がりの中で、最終三句によって絶唱するという、巧みな構成を持っている。こうした技巧の探求は、他の長歌においても見られ、人麻呂によって古代の和歌における長歌の頂点を極めたと言って過言ではない。

こうした長歌のありようは、国家体制の整備と変革によって廃れて行くが、人麻呂の登場によって、叙情を詠む和歌におけることばの表現性は深まりを見せ、その後の万葉歌人は人麻呂の影響を逃れ得ない。また、中古に至ると歌の聖『古今和歌集』(仮名序)として歌人の信奉するところとなり、新たに『人麻呂集』編まれた。さらに時代が下ると、謎の多い経歴は伝説化して伝えられるようになった。

#### ⑧ 〈解答のポイント〉

中国文学史の流れを理解した上で、文学史上の重要概念を中国文学史の実態に即して正確に理解していること。

#### ⑨ 〈解答のポイント〉

本居宣長の『漢字三音考』(天明五年(一七八五)刊)の古代語音韻論に対し、上田秋成が行った反論に端を発した、天明六・七年(一九八六・八七)の論争について、二つの論点、すなわち古代音韻に関する学説対立と日の神の解釈対立を指摘して、それぞれの内容を具体的に説明できているか。また、この論争の顛末が宣長によってまとめられ、寛政二年頃までに『呵列菟(かがいか)』(写本二冊)として成立していることに言及できているか。以上の要素が的確に述べられているかを測る。さらに、一步踏み込んで、この論争の可否はとも

かく、秋成の主張に国学者として宣長との決定的な相違が見られること、などにも言及できているかも知断の材料となる。

⑩ 〈解答のポイント〉

引用の文章で述べられている「目」「目利き」とは、演能者のワザ（身体藝）に注目する鑑賞者、あるいは鑑賞態度を述べていることから、「智」「能を知る」とは役者の身体藝とは別の部分の鑑賞を指すと気づく必要がある。つまり、能一曲の台本に関する工夫のことであり、具体的には詞章のレトリックや、曲の演出、構成の工夫といった部分に注目する鑑賞態度である。